

Everything must change!

今
出
敦



一九七六年の秋に、単身渡欧した。

その前年まで約一年半を大阪で過ごした。

物語は、未来を信じた若い女が、大阪から故郷の東京へ年末に戻り、年が明けた一九七六年の、イギリスへ旅立つまでの出来事を母体に語られる。

東京の西部地域にある杉並と世田谷を行ったりきたりしながら借家住まいなどしていた家庭で育った。なので、新宿という街は、そこそ身近な繁華街といえた。その繁華街が、たとえば東洋一だとか、新宿駅の乗降客数が後には世界一になるだろうとか、そんなことは、当時は、特別に気にもならなかった。

イギリスへ行くのは春と決めて準備していた。それまでの数カ月間を、大阪にいた時と同じように、立派な繁華街である歌舞伎町で働いて過ごす決めた。やはり大阪の時の経験からも大勢の従業員を必要とする大きな箱の喫茶店が好ましいと探した。狭く少人数の人間関係は鬱陶しい。そんな理由だった。

働くことが格別に好きだった記憶はないが、さりとて、就学を放棄してしまっていては、何かをして過ごさねば却って面倒なことに直面しかねない。そんなことに陥るくらいなら、めいっばい外で働き、また手にした給金を頼りに出歩いている方がましと、そういう選択だったろう。

働く店はすぐ決まり、新宿コマ劇場から近い、西洋の古城に似せた外観と内装の大袈裟な建物内部をそっくり接客用にした、その一階二階が、そのまま純喫茶という形態のものだった。当時の日本で純喫茶と名乗る店は基本姿勢としてアルコール類を提供しない。三階には個室の、カップルで利用する同伴喫茶があり、簡単な仕切りにテーブルとベンチシートが置かれただけの狭いスペースに並んで座ると束の間のプライベートが確保される代わりに、時間制の料金は割高と決まっていた。四階には、会議室にも使える広い部屋があった。

天下の歌舞伎町らしく店は終夜営業である。

「大きいねえ。サイズないなあ。新しく作るからサイズ測らせてね」

「はあ。すいません。あのもも、ワタシきつと、そんなに永くは勤められないと思いますが……いいんですか?」

店長は愉快そうに即決し、こちらは困惑した。

ひらひらした安物のドレスのような明るいオレンジ色の制服を、私だけのため店は新調する。スリーサイズを測ると九四×五八×九四だった。当時の日本人女性として身長一六四センチは、まだまだデカイ。まるで金魚のようなひらひらを身につけ、地下街のサブナードで買った銀ピカのヒールの高いサンダルを履くと、しばらくは店長の言いつけに素直に従い店の入口内側に立ち、出入りするお客を、にこやかにお出迎えし、また送り出して試用期間をあつさりパスした。

すぐに、常連のお客たちの顔と名前を覚えた。店の真向かいには炉端焼と昼サロという名称の店舗が営業していた。炉端焼とは、客が選んで注文した生の野菜や肉や魚介を馬蹄形のカウンター内で焼いて調理し、出来上がった食品を、パケモノのように大きな木のしゃもじに載せカウンター席の客に瞬時に差し出すシステムの、夕方から営業する酒が飲める食べ物屋である。昼サロの方は、なんだか得体の知れない雰囲気男性客向けの風俗店らしかった。その二店の店長やマネージャーとおぼしき人物が、それぞれ、ほぼ毎日やってきてはコーヒーを飲んで帰った。

それから、地域の顔役の一人でもあるらしい小柄でビア樽のように太った色黒のオヤジも、やはり毎日きていた。毎日どころか彼は数時間に一回は現われるくらいに、その店をまるで応接室のように愛用していた。ちよくちよく面会や呼び出しがかかる彼の名を覚えるのに時間はいらなかった。常に、しゃがれた声を出して話す。

若い女も一人、常連客だった。暗い陰もないのに、どうにも薄汚く見える。そして彼女の腹は、誰が見ても日に日に大きくなるのだった。

店長と常連客たちが、まだ未成年に見えた女のことを噂して、「どうする気なんだ。産むつもりなのかな」などと気軽に話している。家出娘の素人娼婦を心配するとうふうもなく、それより面倒は困るといった口振りだった。誰

も彼女に話しかけないし、彼女も誰かを頼ろうとする素振りもなかった。だが、同世代のような若い女の不幸を眼にするのは、どうにも居心地が悪い。

店には、入口近くにラジオ局のようなDJブースがあり、日替りで違うDJが通ってきていた。彼らがいる間だけBGMのクラシックを消し、各DJが得意分野の持参したディスクから最新のポップスやジャズを店内に流しては合間に他愛ないトークも交え、悪くはない番組のように仕立てていた。中学の「お昼の放送」では真似事をしていた。彼ら日替わりDJたちとも、すぐに親しくなった。ほぼ毎日のように、

「ナットキング・コールの娘。ナタリー・コールが唄う……ミスター・メロディ！」

とかを、女性DJが叫んでいた。

勝手に「プリンちゃん」というあだ名が付いた。胸前の広く開いた制服のせいだ。最初に言い始めたのは、たぶんフジタだろ。真向かいの昼サロのマネージャーをしていた。精悍な顔つきをした中肉中背の男で、おそらくまだ二十代半ばだったのではないだろうか。良く働く優しい男だった。素性は全く知らない。

「なんでプリン？」

と、とぼけた。全くイメージじゃないなあと思っても黙っていた。

勝手に実家を飛び出し、連絡を断ち、男と暮らし、その男と別れ、そのまま大阪に留まり、当然のように働いて生きていた過去を否定したくなかったのだ。自分の人生を、誰でもない、自分自身でずつと創っていくため、実家の母と話し合いをした。間に恩人がなくては出来なかったことだった。とても気の進まないことだったのだが、どこかで軌道修正する必要に気づいた自分のことを、認めないわけにいかなかった。

永いこと無職だった父親は、発明とやらが思い通りにいかず、私が小五の時に家から追い出され母と別居した。私が大阪にいた間に離婚成立したと聞かされる。五年間も、子供を取り合い争った身勝手な両親だった。父には、母の方の希望もあり何も話せずにいた。住まいも電話番号も知っていたが会えなかった。故郷の長崎へ勝手に帰ってしまった先輩を追いかけ駆け落ちして家を出るまで、母の要望など撥ねつけ父に会っていた。妹の方は母の言いつけを忠実に守り、自分の父親と都合十年間も連絡を取らず全く会わなかった。当時の自分がいくら姉として残念に思っても、経済力をバックに自信満々の気の強い母に脅され考え方を押しつけられてしまった妹に伝えるのは難しく、彼女はそして、どんどん取り込まれていった。父には、だから少し申し訳ないとも感じてはいたが、簡単に説明も出来ないから仕方ないと諦めていた。

永らく休学扱いとされていた都立高校へ復学しないと粘った娘に対し、それならと、私が幼い頃より憧れていた海外へ行く

なら支援するという有り難い提案が母親の方から出された。その提案が、苦しむ娘を救いたい親心から純粹に出たものでもないのは読めていた。

「しばらく、考えてみる」

そう言つて、生活のある大阪へ戻ったものの、付き合っている男性もいたのだが、そこに未来もなさそうと見切りをつける、わりと簡単に決断して年末に大阪を引き払ったのだった。

ひとつには、大阪での自分の生活が、決して本物の自分の履歴で成り立つてはいない虚偽によるもの、というのがあった。いつかは問題とならざるを得ない不安を抱え生きるには、いかにも、まだまだ子供で経験不足だった。それでも、様々な他人の人生の一部を実社会に出て触れたり見たりする機会に恵まれ、なんとなく、こっちの選択ならこう、こっちの選択ならばこうかとかの想像をしてあれこれとイメージを膨らませ、たった一人で生き抜いていくことの大変さや寂しさを分かり、そのどこに、今の自分が望む人生が、未来があるのかを真剣に考えさせられた日々だった。そういった部分は、言いかえれば、ちょうど年齢的にも大阪で過ごした期間というものは、間違いない学校のような役割だったろう。

アルバイトを決めるような気軽さで簡単に勤めを決めたが、ほぼ毎日その店で、ウェイトレスとして当たり前の真面目さで働いた。慣れてくると、早番だけでなく遅番シフトもこなす。

他に決まった約束もなかったの、店長の希望を、そのまま柔軟に受け入れただけだった。

ホールの同僚には、スチュワードズを目指し専門学校へ通う女子が何人かいた。そういう世界があることを知らなかったため新鮮だったが、小学生では抱いていた夢を、女の世界で大変だよと教えられ、すっかり興味喪失した自分との対比が面白いと感じる。役者をしながら夢に向かつて働く若いカッブルもいた。男性の方は厨房にいて、彼らは二人して、なぜだか私を気に入りに、同棲する部屋に招待までしてくれた。

東京の北部にある十条の安アパートへ招かれた。地方出身の彼らを選んだ地域と生活が、どこか、大阪にいた自分の生活を思い起こさせる。なんでも隠さず訊かれたことを正直にズバズバ話す質の私は、その部分を彼らに好かれたかもしれない。ウェイトレスの先輩だった女性の方は、職場にいる時とは別人のような艶やかな落ち着いた顔と仕草をして、愛する男と一緒に、裸電球のように剥き出しの生き方を曝す女の先輩を、もてなしてくれた。

一人のアルバイト大学生の先輩ウェイターに注目した。彼もまた地方から東京の大学へ通うため上京していた。宮城訛りが、どうにも愛らしい。

「K館って、知ってて入ったの？」

「いやあ。入るまでは、全く知らなかったよう。ああいうタイプの大学だと、入学案内のどこにも書かれてなかったし」

「あ、ははは！ 右翼系と知ってたら入るの止めた？」

「さあ、それは。最初から知ってれば。でも自分にはあまり、入れる大学の選択肢はなかったし……」

「まあ、タイブはともかく、何を学ぶかじゃない？」

通った都立高校は、彼の行く大学の裏にあった。彼が話す言葉は、標準語とは違う抑揚の不思議なリズム感を持つ。ホールの制服姿も初々しい大学二年生の男は、丸顔の童顔を真下に向け肯定する。裏階段を最上階まで上がったところにあるタイムカードの出勤退勤を記入する場所で、そんな会話を交わすと、それからは普通に話す仲になった。

店からは、正社員だけに特権として食券が配られた。それを利用して、休憩時間や退店後に提携する近所の大衆食堂へと出向く。店長に教えられたとおりの場所へ着くと、その食堂が、主に労働者に向け開いているものとわかる。いつ行っても営業しているのだっ広い明るい食堂は、客の数には関係なく活気があった。厨房スペースでは、あちこちで盛んに白い湯気が立ち登っている。

おじちゃん、おばちゃん、と声かけしたくなるような働き者が三人いて、白服に白頭巾を被り、せかせかと料理を作っては出し作っては出してきてくれた。キャンティーン形式で小鉢など選び、その他の主菜や、温かい汁とご飯は声を出して対面で注文するシステムである。

魚や肉の主菜を頼み、付け合わせに野菜料理の小鉢を選ぶ。

それに白米のどんぶり飯と味噌汁や豚汁をセットにした定食を頼むことが多かった。あるいは飯におかずが載せてある典型的な丼ものや温かい汁ごと食べる麺類を選ぶ日もあった。特に目立った会話はなくても、すぐに、「今日は何にしますか？」ぐらいの親しみある笑顔なら簡単に受け取ることが出来た。

料理をしないわけでもなかったが、家庭的な献立や雰囲気になりに飢えていた。母が作り置きする料理も家庭料理には違いなかったろうがレパートリーはパターン化していて、冷えていた。朝も昼も夜も、家族はバラバラに飯を喰い、またバラバラに風呂にも入った。忙しい。ただそれだけの理由で、物事は多く追いやられた。

新宿の歌舞伎町は身近と思える街だったが、実際に内部へ昼夜を問わず通うのは初めてで、面白く飽きなかった。大阪で受けた上方風の人情も好きだったが、必死で働く人の多いこの街も嫌いじゃなかった。

関西には、日本列島の西の地域にある九州や四国や中国地方の人間も集まる。全体的なメンタリティーは明るく、食べること、遊ぶこと、喋ること、笑うこと、総合的に元氣だ。働くことにも意欲的である。主張を戦わせることに気後れがないし、合理性というコンセンサスが優先されても、手厚い人情が人の心を救いとしてカバーする。そうした優しさのある職場環境に慣れていた。

都内で初めて働いてみて感じた。冷たいわけではないのだが、

どこか互いに遠慮や分別のようなものが、うつすらべールをかけるようにして外側に存在し、すぐには打ち解けにくいよそよそしさを醸している。どこか、あなたの目の前にいるこの私は、今は世を忍ぶ飯の姿なんですとでも言いたげに、それぞれが、おとなしい。それに、およそ内容は変わりようがない形態の仕事をしていたはずなのに東京のその店でのやり方には、合理的ではないと思われるところまであった。

「ここをこう変えたら、いいんじゃないですか？」
簡単には言いださない暗黙の了解でもあるのか？

あらゆる地方から人が吹き溜まる首都ではあっても、東京には、やはり列島の北部や東部にあたる北海道から東北や甲信越地域と北関東からの人々の流入が、より多いと気づく。日本に限らないことと思うが、暖かい地方、日本の場合では西側に住む人々のメンタリティーと、比較的寒い地域である東側に住む人々のメンタリティーの差が、こうした違いを産む。東京生まれでも、東京については、まだ知らないことばかりだった。

毎日の仕事を終えると、決まってシモキタへ向かった。

当時ちょうど下北沢は、後の、ロンドンのカムデン地区のように、往き場を模索する若者たちが自然に集まり造る新しい文化的活動が活気づいてきている途上だった。新興の中流が多く住む野暮ったかった住宅街でしかなかった乗換駅のある街は、シモキタと、つづめた愛称で呼ばれるようになり、ファッショ

ンや小劇場に代表される演劇など若者文化の発信地として、この時期から大変身を遂げる。私には、地元だった。

ただ居場所を必要としていた若い女が無理なく隠され、ジツと棲息していても誰にも咎められない。いわゆる団塊世代たちが始めたムーブメントからの恩恵を、続く世代も受けられた。彼らが始めた新しい飲み屋の形態では、地元のヤクザなど地回りが見向きもしない利益率の低さの代わりに、とても自由な、遊び場みたいな空間が生まれている。

改築された公衆浴場の一階にある空きスペースを利用した『愚』や、紙粘土で手作りした人形を細い革のネックレスに付けて加工したアクセサリーなど店内で売っていた『戯』など、北口にあった店を経て私は、南口にあった『段』へ行き着いた。

どの店でも、シャイで人好きな若いマスターが独りで自分の城を守り、見るからに手作りでオリジナル感の溢れる内装とインテリアを自己主張の道具にしては、話し相手となりそうな客を密やかに待っていた。薄暗い洞窟の中のような店内には、煙草の煙に良く似合う欧米文化から発生したロック音楽の大音量が決まって流されている。

「あの。この、バーボンって、なんですか？」

『愚』のマスターにメニューを眺めながら訊くと、試してみますか、美味しいですよと勧められる。そこで獲得したばかりの知識と経験は、日本一の銀座のバーにいる自分は正しいと信じる母にも授けることの出来なかった真実のように受け取られ

る。

私は、考えていた。毎日、考えていた。その考えは私を捉え放さなかった。

自分の意志で家を出て、勝手に人生を変えた。それなのに、また戻ろうとしているのか？

自分が間違っていたとは思いたくない。けれども、あのままでは、私の人生は明るさに欠けた。たぶん……

だけど、これって、逃げじゃないのか？ 自分の人生を自身でやろうとして挫折し、逃げてきた親に、また頼る。

なんて！ 情けないんだ！

そう思うと泣けた。

私らしくない！ きつと、今が、自分の人生で一番惨めで情けない辛い時なんだ。

毎晩のように自分自身に語りかける。

でも、仕方ないじゃないか。他に方法が見当たらない。

あの人には金だけはある。金を出すのが愛情と思っているのだから、出して貰いましょう。そしてそれが彼女の虚栄を満たすことにもなる。なんの文句があろう。あるのは、この嫌な気分だけなのさ。

*

ある日。

向かいの昼サロの入口前でいつも呼び込みをしている常連客のフジタが話しかけた。

「プリンちゃん。今度、オレと飲みに行かないかい？」

「いいよ、べつに。ワタシなんかと飲んで楽しいなら」

彼は喜び、テキパキと段取りをつけた。

彼に連れられ、サパークラブへ行く。広い店内フロアは淡いロマンチックな照明で大人の社交場らしく演出され、中央には、ダンスをするための空間も設けられている。コンパクトな生演奏のバンドが軽めの曲を奏でている。席に案内された私たちは運ばれてきたカクテルで軽く乾杯した。客の入りは、まだ少ない。時間が早い。物珍しくて首を回して眺める女を、獲物を料理する感覚の男は満足げに観察している。

「酒は、強いだね？」

「うん。遣伝らしい」

彼は意味ありげに席を立つと私には残れと手で合図し、グラインドピアノに自分だけ近寄っていった。何かをピアノリストに告げるとステージに寄るようにマイクを握り、やおら熱唱する。まだカラオケなど存在しない時代だった。驚いた。

彼は私を見つめながら、はにかむように、一つの歌謡曲を部分的に替え歌にしたなど分かるようにして熱心に唄った。その曲を知らなかったが、彼の想いが託されているのを分かった。

その口説き方が素人ではないのも感じたが、こんな小娘に対し

てまでもと、その生真面目さに少し心を動かされる。いい歌だな、と上手な彼の唄を素直に鑑賞した。ぎこちないチークダンスを、生バンドの奏でる「青い影」に合わせて踊り、彼の求めに応じて、その晩、彼に抱かれた。

付き合う相手のいないフリーな状態では拒む理由もない。彼を嫌いじゃなかったし、その一所懸命さに報いたいと感じていた。ある意味に於いて、記憶に残ってしまうセックスだった。

彼は、いたわるように私を抱いて、普通の動作を正常に向き合ってしていたのだが、急に抜いて、私の口元へ向けた。驚いて、濡れている張った昂まりを眺める。

「しゃぶれ！」

命令された。男が体重を載せて女の動きを封じている。

観念し、くわえた。自分の体液からくる酸の酸っぱい匂いと苦い味がする。未体験だった感覚はしかし生涯忘れないくらいに強烈で、そこには、女の性の本質を突かれた巧妙さがあった。

これを嫌いじゃない。被虐的に強制されることを悦ぶ自分がいる。そういう内面的な快感のあることを初めて意識した瞬間だった。天井に、巨大な鏡が嵌めこまれていた。

フジタとは、その後も誘われれば、食事したりホテルへ行ったりした。特に付き合っているとか、惚れたとか、そういう感覚はなかった。じきイギリスへ行く身では、男に惚れたりしている場合じゃなかった。彼のことを深く知りたいなど望まなかったが、向こうは、少し違ったようだった。質問には正直に答

えようとしたり。しかし余計なことは、全く何も話さなかった。だからと言って、会話が弾まなかったわけでもない。話そうと思えば、互いのプライバシー以外にも話題はいくらでもある。仲は悪くはなかった。ただ干渉し合わないだけだった。

やはり道を挟んだ向かいにあった炉端焼の店へも顔を出した。自分の働く喫茶店の常連客だった、鉢巻きをした体格の良い店長は歓迎してくれた。迷惑のわからない開店直後を選ぶ。指定されたカウンター席に着くと、壁に貼りだされた短冊に書いてある食材の名前を見て注文したり、馬蹄形のカウンター内側にいる店長に任せたりして、気の向くまま焼いてもらう。焼きたてで、どれも美味しい。いくらでも食べられそうだった。炭火で焼いただけの野菜や肉や魚介は、生醤油やポン酢やマヨネーズにさらに精を加えられる。もともと食べることに積極的で、恐れず何でも元気に食べては残さないような心がけていた。とても綺麗に骨だけを皿に残す。まるで、単独行動を好む、適度な警戒心と旺盛な好奇心を併せ持つ若い野良猫のような小娘であった。

遅番の時には、仕事をあがると毎晩のように新宿から小田急線に乗り下北沢で降りていた。たまたま、ホシ君が下北沢駅で下車して帰ると知る。K館へ通う彼とは、だいぶん親しくなっていた。彼のことを嫌いじゃない。幼いが純真で素直な好青年と思った。少し猥雑な感じのする口元と、ぶりつと張った臀部

が好きだった。

「家、代田なんだ？」

「そう」

「へえ。どこ？」

彼に、住んでいるアパートを教わる。

それから数日後の晩に、たいした意味もなく彼の住む部屋を突然訪ねると上がり込んでいた。どこかの飲み屋かライブハウスの帰りだった。ただ、家に帰りたくないだけだったかもしれない。

驚く彼に平然と、「泊めて」と頼んだ。彼は応じた。二人で並んで蒲団に横になった。若い男女がシチュエーションをどうするのかに興味の対象だった。

彼は動かない。私も動かない。二人の息遣いだけが聞こえる。

しばらく時間が過ぎてから彼が、かすれる小さな声で言った。

「さわって……」

「え？ さわるの？」

いいよ、と重ねて答え、彼の布団の中へ右手を突っ込むと下着の中にいた、温かく柔らかいものを遠慮なく触った。徐々に、硬く大きくなるのが嬉しい。かわいいなあ、女なら誰でも得られる自然な感情が湧く。でも彼は動かない。されるがままの状態だった。不思議だった。男の性は、まだまだ未解明だった。彼は勝手に果て、そのまま寝込んだ。たぶん彼も寝入ったのだろう。

昼前に急な来客があり、アパートの玄関ドアがドンドンと無遠慮に叩かれた。

「おばさんが来た！ 悪いけどすぐ帰って！」

横で寝ていた男は跳ね起きて、切羽詰まった小声で、恋人ではない女を揺り起こす。

「へえ？ 帰るって…… どうやって？」

一つしかない玄関ドアの方へ顎をしゃくりながら声をひそめて訊いた。情けない顔つきの男は、私の脱いだ服を持ちあげオタオタと窓を指差す。幸いにして、アパートの部屋は一階だった。

どこかの映画のシーンみたい。でも男女が逆だな。

そんな無意味なことを連想しながら素早く服を着て、窓から音を立てないようにと、そうと静かに靴を置いた。その間にも、

「こうちゃん、いないのー どうしたの、開けて？」とドンドンは続く。

「いるよー ちょっと待っててー！」

大声で返事しながら、慌てふためきドタンバタンと敷いてあった蒲団をかたす彼を眺めた。

吹き出したいのを堪えながら、窓の外でそと身を屈めてから街へ帰る。背後では、待たされた来客がドタバタ喜劇の如くに、入れ替わり部屋へ招かれた話し声がしていた。

東京へ戻ったからには、仕事の他にもすることがあった。少しづつ、旧友たちへ連絡し始めた。麻雀仲間として親しかった男子が数人いて、同じ遊び仲間のグループの中に、親友だった女子もいた。

最も親しかった、アキ、フミオ、イトちゃんには、母と話すことになった前年初夏には真つ先に連絡していた。

事情が事情とはいえ、全く相談もせず急にいなくなり、今まで連絡しなくてゴメンねと素直に詫びた。フミオもイトちゃんも怒らず話を聞いてくれたがアキだけは、なかなか許してくれなかった。

「フミオとアタシはいいけどさあ、アキは怒ってるからねえ。イマデ」

イトちゃんは、心配そうに教えた。仕方なく、羽根木にあつたアキの家の近くの公衆電話から電話して、なんとか彼に、外まで出てきてもらう。

「オマエなんか、もう友だちじゃない！」

「嫌われても仕方ないね。でも、あの時は、誰にも話せなかったんだ。それは分かる？」

「心配したんだぞ！」

暗い路上で顔を紅潮させて怒鳴る相手に、ひたすら謝った。同級生たちは、高二の三学期をやっている。この仲良し四人の中で私を除く三人は、都立高校へ入学後には免許を取り、モーターバイクに乗ったり乗せてもらったりもして、地域で有名

だった『黒い皇帝』という名称の暴走族グループの活動にも参加していた。それなりの高校生生活であろう。当時としては、私には意欲の湧かないことだった。

人が走るには、手段を問わず、必ずや「走りたい！」とする欲求の源となる理由が存在する。そのことへの理解だけは、おぼろげながらもあった。先輩と駆け落ちしなければ、モーターバイクの免許は自分も取ると心に決めて予定はしていた。ただし、集団で反抗したい気持ちがかからない。反社会的行為をして目立ったところで、子供っぽいだけだと見えていた。先輩後輩とか面倒そうなことも自分には向いてない。従って、集会とかへの参加を誘われても必ず断った。

出身中学の一級上にいた、色白で眉毛を剃ったナヨツとした男が「族」の中で頭角を顕していると聞かされると、それこそ、なおさら不気味さを意識させた。

やるなら独りでやれよ？ 反抗したいならツルむなよ？ その方がカッコいいぜ？

だいたい、そんなような考えがあった。だが、当時は口に出せなかった。疾走感を精神安定剤のように、癒しや、また瞑想にも使えるのだと体感を以て知るのには、もつとずっと後年のことである。そして麻雀や運転には、個人の性格や人間性が良く顕れる。あるいはセックスにしてもそうだ。おとなしそうな性格に見えている人物の持つアグレッシビティ。攻撃性や自己中心性や食欲さなど、隠しようもなく出てしまう。その逆の、恭

順や自己犠牲的な精神や冷静さ、また諦観も同じく。そういった心理ゲーム的な側面に人間は惹かれる。

公道を走らせる車などの運転は終始孤独な作業のようであり、周囲の交通に関係する様々な人間たちの心理、すなわち動く箱の中にいる人間だけでなく、二輪車に乗る人や歩く人たち全ての行動心理を読み合って成立している。そこにコミュニケーション能力や感受性の低い者が混じればトラブルや事故は起こりやすくなる。

今や世界的に有名となったアニメに登場するモビルスーツを着て、観念の力を借り動かし対戦するまでもなく、日常でも我々は近似のことをやっている。

家で静かに孤独にいては感じることの不足する他者との相互のコミュニケーションという人間の社会性の部分が、外へ出ると、当たり前に発揮され孤独な個人の心を軽くさせている。そこが面白い。若さは刺激に敏感だ。脳にある神経細胞は、まだ渴望している。常に、新しい刺激をバネに、活発に触手を伸ばし記憶の伝達というネットワークを構築しては、経験という個人的財産を蓄積していく。

中学時代の麻雀仲間だった同級生の男子が、みんながみんな暴走族へと走ったわけでもなく、私立高校へ通う旧友たちにも連絡を入れる。

驚かれ、喜ばれ、激励され、感激させられた。

もいた。

駅のロータリーから新宿通りの幅広の交差点を渡った先の右角に、当時から、夜遅くまで贈答用の果物など扱って商売していた横長の店舗があった。商品は常に道端にも、はみ出さんばかりにして陳列されている。箱入りの形の良い赤い苺や大きな房の鮮やかな黄色いバナナ。種類の豊富な大きめの林檎やオレンジに季節の果物。さらには葉の付いた熟していないパイナップルなど売られている。その店の領域の終わる境目らしき場所に夕方近くになると、決まって、大小のパネルに引き伸ばされた見覚えある芸能人のポートレイト写真や、あるいは無名の新人タレントなのか媚を売る表情や仕草を強要された若い男や若い女の巨大な写真が、照明を当てられ、通行人の眼を奪わんと壁に立て掛けられていく。忘れられない少女のヌード写真があった。

その少女の名前も、多少は有名なのかも何も知らない。だが、その裸体には眼を奪われた。似ている。その少女の裸体は、自分自身が鏡の中に見る裸の姿と酷似していた。少し外向きにツンと張った、お椀を伏せたような丸みのある乳房。健康的な弾力を予感させる幼児体型を残したままの脹らみを持つ腹。均整の取れた手足。

自分の裸が人目に晒されているような困惑を覚え動揺する。年齢的に間違いなく近い。両手で大きな赤い林檎を股間まで下ろし、下半身にあるヘアの部分を隠すような不自然なポーズ

を強いられた怒り肩をしたショートヘアの女の子。その眼が、阿修羅のように怒っている。怒りの奥には確定した哀しみが淀んでいた。

自分の裸や存在が商品となる感覚がまだない。けれども、目の前のパネル写真の中の少女は、自分と同世代だと仮定して、どんな人生を送り、どのような事情で大切なものを売ろうとする気になったのだろうか。それを考えると目眩がした。こんな往来に堂々と、少女の痛々しいヌード写真が、取り締まられもせず興味本位に通行人に晒されることにも違和感がある。そのパネルは人気があったのかなかったのか判断できなかったが、暮れ始める時間帯に果物屋の前を通過する時には、いつまでも、通りを威嚇するようにして存在し続けた。

フジタの誘いに応じてから間もない日だった。

早番を終えて帰ろうと店を出ると、いつものように、ワイシャツにネクタイの上に派手な色の法被を重ね着して、大声で同じセリフを通行人へ呼びかけて愛想笑いを振りまくはずの彼が、どことなく浮かない顔をしている。

「どうしたのさ」

「女の子が足りない。今日は忙しい日なのにさ」

「ふうん。アタシで良ければ手伝ったげようか？」

「オマエに出来るかなあ」

ただ座っていればいいだけだからと言われ、薄暗い昼サロの

店内に初めて入る。いくつかのボックスシートに分けられたフロアには、半分くらいに人影が見えた。その一つに案内されると、学生らしき若者のグループが喚声を挙げ、あてがわれた女の子の座る場所をサッと空ける。大学生だろうと思えた彼らに挨拶して座った。

なにか飲み物でも頼んで話したりするのかしら……

くらの、軽いのんきな気持ちで落ち着いていた。いきなり両脇から手が伸びてきて、胸とスカートの中まで無遠慮に触られる。遅ればせながら、そこで初めて、自分が大きな勘違いをして間違った場所に迷い込んでいると思ひ知らされた。

「ちよつと待って！」という言葉は、かき消され、
「ダメ！ 止めてっ！」と叫ぶ頃には、胸の方の手はブラジャの中へ、スカートの中の方の手は、ショーツの端を掴んで脱がそうと力を込め始める。ほとんど悲鳴を挙げて、服を手で押さえると直しながら野うさぎのように飛び出す。そのまま店の外まで走り出た。

「ごめん！ アタシには無理だっ！」

両手を合わせた。ドキドキが収まらない。そのまま走り続ける。フジタは、ニヤツと笑って諦めたように手を振った。

男の本性を垣間見てしまい、本当に驚いた。知っていると思ひ込んでいた男たちに、そのような一面があると考えたことがなかった自分を恥じた。普通の学生に見えた彼らが商品としての自分に向かってきた時には、ギラギラと、好色な血走る眼を

した野獣そのものになっていた。大阪で、見知らぬ男たちに強姦されそうになり、独りで大立ち回りをして気を削ぎ難を逃れた武勇伝すら持つていても、金さえ払えば許される世界のある現実を実感することはなかった。不思議と腹は立たない。別に彼らに落ち度はない。こちらが悪かった。世間知らずで、好奇心と負けん気が強かっただけである。学生たちは私が驚いて逃げたので、彼らも驚き落胆していた。

「えー？」という輪唱を背中に聞いた。

馬鹿なことした。けれど経験は経験として、きつと、いつかは役に立つ。

そのように自分を納得させた。フジタに対してさえも、全く腹は立たない。私たちは、その後も変わりなく交流を続けた。

妹の高校受験が迫っていた。

勝手な姉である私は、当時は家に金も入れずに、働いた給金を手に、都内のライブハウスへも顔を出していた。いつも独りだったが自然と知り合いが出来る。その中に、美術系の女子大の附属高校へ行っている学生がいた。彼女は賢く、また学校の話や聞くと、どうも面白い学生が多く在籍する充実した高校生活のように感じられる。偏差値による輪切りを押しつけられる弊害は、都立高校では常態化していた。公立中学のように、生徒に様々な能力的な差が大きく開いてないのは学習には善とされるかもしれないが、はつきり面白みには欠ける。

母は、美術だけに限らず芸術全般を愛好しているのだからと不思議な自慢を子供に語り続けた女性だった。妹は中学では、美術という科目が得意で好きでもあった。奔放に生きるしかなかった姉とは違い、静かな環境を好む妹には、あるいは女子高のような制度と落ち着いた雰囲気かもしれない高校の方が向いているのではないかと勝手に考えた。果たして、思いつきから強く勧めてしまった結果は、彼女の運命を決めることになった。たまたま最寄り駅も近いという利点もあり、母がまた大いに乗り気になったことも手伝って、妹は、急にバタバタと、その高校を受験することに決まった。

確かに面白い魅力的な学生が多い学校ではあったらしい。だが入学後に彼女は思い知らされる。専門というのは、ただ好きなかただけでは太刀打ちできない、才能や永年の努力がモノを言う世界だった。そのことを、大した準備も自覚もなかった彼女は、より早めに知らされることとなった。けれど引き返せない。母親が、少しでも有利にと、裏道を使えまいかと勝手に動いたことも大事な思春期の時期にあった妹の精神を傷つけた。その期待の大きさは、無言の圧力となる。私の責任は軽くない。

*

大阪にいた自分の生活との接点が、まだ少しだけ残っていた。付き合っていた男性の家に、たまに電話したり、彼からも電

話をもらっていた。イギリスへ行くことにしたので、発展的な話にはなりようがなかった。

「元氣？」

「まあ、ぼちぼちや。ジブンは、どないなんや？」

そんな会話ばかりしていた。

ウメチカにあった巨大な純喫茶のチェーン店でバイトしていた彼は、同僚だった。私たちは、共通の知り合いである他の仕事仲間たちの噂話などして、本当に言いたいこと訊きたいことは避けていた。

彼は、じき大学を卒業する。七歳年上で留年していた。手間のかかる実験ばかりが残されていた。神戸に近い山側の高級住宅地に自宅があり、彼の、その日本人離れた彫りの深い顔立ちや落ち着いた物静かな立ち居振る舞いなど他者に与える風貌の印象その総てからも、間違はなく異性からはモテていた。

彼より前には、駆け落ちした先輩とは離れ、在日の、六歳年上の朝鮮系の男性と真面目に付き合った。やはり大学生から社会人になる節目の時期に相手の男性がいて、当たり前な発展をする寸前で、自分が怖気づいた。のめり込みやすいタイプだけに、またしても、惚れた男に人生を捧げて振り回されて終わるのは嫌だった。

平日の昼時や週末の夕方など繁盛する時間帯に、奥行き広い厨房に向かって、脚力と記憶力の限りに取り取って集めた注文のオーダーを一気に吐き出し浴びせる快感。チーフの代わ

りに華番を任された端正な彼の顔を目がけ、そうしたバトルを楽しんだ。

あたかも、バレーボール試合での相手サーブを受ける緊張した面持ちの選手たちへ向け、私の強力なサーブが打ち落とされる。すると、守りの姿勢で位置にいた厨房の白服に白長靴を履いた男たちは、右往左往しながら急に活気づいて作業に没頭し始めるのだった。彼のムツとした表情と、負けまいと少年のように真剣になる様子が愉快だった。私は、ホールにいた他の先輩や同僚のウェイトレスにもウェイターのバイト大学生たちにも引けを取らない大量注文取りであり、またそれらを、正確に楽しみながら捌く腕を持っていた。

オカダさんとならば、互いに無理をしなくても続けられる相手として悪くないと判断されていた。オカダは偽名だった。偶然それを知ってしまうと、自分も偽名で生きているのだしと意味のない安心を得ている。彼は、私と同じ年だったアイドル歌手に似た、やはり同世代の女子高生バイトともデートしていた。感づいていたけれども、知らぬふりをしていた。別れたのには、そうしたことも全く無関係ではなかったらう。

歌舞伎町の店でウェイターをしていた少し年配の男性が、めでたく再就職先を見つけて退職することになった。みんなでお祝いしようということになり、幹事をやった。主にホールで働くメンバーが集まる。店の営業に差し支えない晩に、可能な

者だけで宴会した。スチュワードスを目指す容姿端麗な美女三人組も、役者としての成功を夢見るカップルもホシ君もいる。

ホシ君とは、あれ以来は、普通の同僚としての付き合いに戻っていた。お互い少しだけ気恥ずかしさが残り照れ笑いしたが、それだけだった。特に傷つけ合うようなことも、遣り取りもなかった。それでも、その晩の送別会での彼は、いつもより特別に優しかった。

退職するサワダさんは、少し年上だっただけに、みんなには頼れるお兄さんの存在だった。小柄で誠実で、人間的な可愛い魅力を持つ人でもあった。だからこそ集まりが良かったのだらう。私たちは九人いた。

「どうぞ、たくさんの本を読んでくださいね。世界中の人に会うことは出来ないけど、本を読めば、会えない人にも会うことが出来ますよ。頑張れー」

色紙に書いた。少し酒が入っていた。彼が素直に感激してくれて嬉しかった。

そろそろ資料を集めなければならぬ時期に差しかかっていた。留学先を決めなければならぬ。英語圏でなければ本当はフランスへ一番行きかけたのだが、初めにフランス語は勇氣のいる選択だった。

同世代の日本人の女の子は、大半が、少女漫画のフランス革命を題材にした大河物語に憧れた。アルセーヌ・ルパンやジュ

ール・ベルヌの作品も、わくわくして読んだ。アメリカよりはカナダの自然の方により懂れたが、カナダで英語を習うより、やはり本場はイギリスだろうという結論に最終的にはなった。

小学六年の頃よりラジオの基礎英語を率先して聴いて、英語をマスターして海外へ行くとの意欲を早くから持っていた。中学でも、英語は好きな教科で得意でもあった。いつしかそれも、途中から適当になってしまったが、夢を諦めてはいなかった。

イギリスにも個人的な懂れがあった。イギリス人が書く小説にも親しんでいたし、その、強い精神力に裏打ちされた前向きな考え方が、とても好きだった。それに、何より当時はブリテッシュ・ロックの全盛時代で、心酔していた。特に、プログレッシブ・ロックが好きだった。イギリスに行けば、より身近に体験できるのではないかとの淡い期待があった。それより他に、詳しい地理も歴史も政治的事情も何も勉強せず、勝手に懂れた。

皇居の近くにある英国大使館の政府観光局が、離れた別の場所にあった。ブリテッシュ・カウンシルという名称だった。

教えられたその場所へ行き、留学するなら、どのような可能性と行き先があるのかを資料を渡され考えた。現役高校生のまま現地の高校へ編入するなら、話は簡単だったかもしれない。だが、そうではなかったために、一般的な学校とは違う語学の専門学校が必要とされていた。既に英語教育から遠ざかってしまっていたので、レベルは貧弱なものだった。そしてヒアリング

と会話能力は、ほぼゼロに等しかった。

母は、自分の勤めるバーに来ていた客で、子供を留学させた経験を持つ人物を紹介してくれた。彼女には、そうしたことの総てが営業の一環となる利得もあった。その人物が親切にも、ちようど留学から戻ってきていた自分の娘を、さらに紹介した。彼女のことを、とても気に入った。私たちは初対面で意気投合し、お互いが、物怖じしない冷静な性格と見抜いた。資産家の社長令嬢である彼女と、得体の知れない人生を送る、その日暮しの銀座のホステスの娘。詳しく話さなくても、傷ついているという連帯感、感覚的にすぐ伝わる。

電話で話してから待ち合わせ場所を決め、新宿の、狭い喫茶店で初めて会った。二人の兄がいて、それぞれイギリスとアメリカに留学していることも彼女は語る。

「イギリスに行くじゃない。テレビで普通に、エルトン・ジョンとかサンタナとか出てるわよ」

「ほんとですかあ。いいなあ、それ」

期待が膨らむ。

彼女は、美しかった。とても上手に、綺麗な卵形の輪郭を持つ顔に薄化粧をしている。笑顔で愉しそうに話す彼女を、盗むようにして見つめた。たった一歳しか違わない彼女が、とても大人っぽく見える。決心が確信へと変わった。

小学高学年の時だけ家庭教師が付いていた。母が雇われマダムをしていた店でアルバイトのホステスに応募した偏差値の高

大学の学生だった彼女は、請われて、店でホステスをやる代わりに「ママ」の子供である私と妹の家庭教師を引き受けた。父が別居してからは夜になると子供だけになる我が家では、しばしば夕飯の用意がなく、金だけ置かれてあることも珍しくなかった。家庭教師をしに来ただけの彼女は仕方なく、二人の小学生を連れ、まずは腹ペコの子供たちに何かを食べさせようと苦心させられたりもした。

私の留学が決まると、家庭教師だったユカちゃんと呼ばれた。彼女は私の妹を可愛がり、家庭教師でなくなつてからも相談に乗るなど交流を保った。実家が広島なため独り暮らしだった彼女は、たまに我が家の日曜の夕飯にも同席していた。

「英語が全然できないんだしさあ。やっぱ、ホームステイより全寮制の学校の方が安心じゃないかって思うんだよね」

同意を求めるように家族に話す。そこには、きちんと手入れされた整った美しさを見せている広々としたイギリス式庭園と、貴族の別荘であったものを利用したという、憧れを具現化するようなクリーム色の見栄えの良い寄宿舎の写真を遠景で載せたパンフレットが示されていた。

ユカちゃんが、他の誰も理解しない英文の説明を読んで聞かせる。素晴らしい文句が続いた。

「とりあえず、ここ。ここへ手紙だしてみようよ」

決めると気が急ぐ性格をしている。人並み外れた馬力も、度胸と能弁という強引さも持つ。買物をする時でも、だらだら

と迷うのが嫌いだった。だから行動する時には単独が向いていた。決めたら自分で責任は取る。そうした強い性格を持つている。

若い女ばかりで、資料のパンフレットを繰り返し手に持ちひっくり返しながらも、ただ憧れを勝手に夢見ていた夜があった。最も年長だった母にしても、まだ三十代である。

くだんのパンフレットをユカちゃんが持ち帰り、英文の手紙を先方の学校へ代筆して送ってくれることに決まった。

その学校は、ロンドンよりずっと南の、海沿いの静かな町にあった。

二月も終わる頃になって、オカダさんが電話で言った。

「なんとか、卒業できそやねん」

「へええ。良かったやん」

大学の事情などには全く疎かったため生返事した。本来ならば、就職活動も完了し行き先が決まっていれば、自分に関係と関心が薄く、質問すらしていない。

「ところで、なあ」

「なに？」

「こんど、いちど、そっち行きたい思うてんのや」

何かを確かめるようにして、一語一語を、ゆっくりしたペースで、だが一気に言う。一瞬の間があった。

「えっ！ そっちで、東京ゆう話かいな」

「そや」

「あつ、ほんま。東京。初めて、やないよね。いつ、なん？」

お互い、努めて平静を装う。彼が予定していたのは二週間くらい先の話だった。まずは、こちらのスケジュールを知りたいと言う。彼に合わせて必ず休みを取ると約束した。

しかし、なんで来るんだろう。分からないなあ。

正直なところ、彼の目的が、さっぱり読めない。普段は笑わせたり面白いところのある人だったが、クールで本音をあまり出さない気難しい男でもあった。それでも、会いに来てくれるのが嬉しくないわけではない。

同級生に連絡して、大阪にいた時に付き合っていたハンサムで面白い人が来るから、一緒に麻雀してやってくれないかなと頼んだ。オカダさんとは、ホール代表の私を交え職場の厨房にいた楽しい仲間たちで徹マンしたり、甲子園にプロ野球観戦に行ったりもした。ふと、自分の仲間たちと彼を、相互に引き合わせてみたくなかった。

ユカちゃんがイギリスへ送った手紙の返事を持ってきた。受け入れ可能と書かれているらしかった。

だが、母の方から、急に資金の都合がつかなくなったから九月に延期してくれと要望される。大した差ではなかったのですが、異存はなかった。従うのみ。

ユカちゃんに、また手紙を出してもらおう。入学は九月にしま

す、という変更内容で。

このところ、フジタの様子が少し変だった。何かにイライラしているみたいで、急に不機嫌そうに黙る。あまり刺激しないように気にしないそぶりだったが、何度も同じことを質問され意識しないわけにいかなくなった。

イギリスへは何しに行くのか。いつ行くのか。いつまで行っているのか。

だいたい、この三つを中心に訊かれていたようだった。英語の勉強をしに春から行くが、期間は二年間くらい、としか言えない。寄宿舎のある全寮制の学校には秘書課程のコースもあり、二年目は、それを取るかもしれないなどと不確かなことも言った。

彼は、「ふん」と、また黙る。急に出発が九月に延期となった事實は、まだ伏せておこうと自衛的な気分陥った。

時間に余裕が出たからだったのかどうか、少し内省的になり、下北沢の『戯』で売られていたようなアクセサリーの人形を、自分も手作りしてみたくなった。紙粘土だけでは弱かったので勝手に食パンを混ぜてみたりもして、芯には細い針金を入れるとペンチで先を器用に丸く加工し、頭、胴体、手足をそれぞれつなげると成型し、食パン入りの粘土が固まったところにポスターカラーを塗って、髪の毛の部分には余っていたレース編み

の、鮮やかな濃い緑の糸の束を貼りつけた。子供の頃は、手工芸も決して嫌いではなかった。そうして出来あがった人形を自分の分身のように愛しく思い、皮の紐にぶら下げて、胸の谷間に人形が揺れる按配に調節し紐を首からかぶり得意になつて外を歩いた。

残念ながら何かが足りないらしく、硬く固まつている粘土の部分は、しばらくすると簡単に割れて欠けていった。

仕方がないな。作り方が適当では、やはり保たない。

潔く諦めた。その頃には化粧しても、大阪仕込みの濃い派手なものから、徐々に、憧れた年上女性のような薄いものへと変化していつている。

夜のシモキタ通いは、ほぼ、南口にあつた『段』に集約していた。

『段』にはまた、同級生の男子も来ていると知り、マスターのダンに名前を教えられた。二人いたが、二人ともが中学時代に親しくなくなつた男子だと思つと、ひとりでに笑みがこぼれる。

ダンは、魅力的な大人だつた。大人という形容は年齢的なものを指すだけで、実際のところは、真剣に本気で一緒に遊んでくれるプリーダーのような役割をした兄さん、という親しみを感じさせられる若者だつた。文学座の研究生だつたというのは人伝てに聞いたが、役者を断念した理由までは知らなかつ

た。客がいないと、いつも本や漫画雑誌を読んでいて、当時は、ポップ・ディランばかりを店ではかけていた。急に思い立つて店内改装に熱中するのも、しよつちゆうだつた。まるでガウディの教会のように、常に成長し続ける途上にいる生き物のような店に、個性的な美学を持つオシャレをした、長髪の、少し憂いのある孤高の美しいダンは棲みついていた。

アメリカン・ロックにもフォークにも疎かつたためにポップ・ディランも聴かなかつたが、いきなりエレキギターを採用するようになったばかりのポップ・ディランを、繰り返して、『段』で初めて聴かされた。「ディランも悪くない」と、分かつたようなことを思つた。今でも、当時に聴かされた「ハリケーン」など聴くと胸が逸る。あの頃を思い出す。

約束どおり連続した休みを取り、東京駅の新幹線の改札口まで、暮れに別れたばかりの男を迎えに行った。べつに喧嘩別れしたわけではないので、仲は悪くない。

「よう来たね」

小さくそう言うと、照れるので先へ立つて歩いた。

「どこ行くん？」

「ん。麻雀。用意してんねん」

「え！ 麻雀かいな？」

「そうや。ワタシの友だちも見せたげる」

驚くオカダさんに、確信的に悪戯っぽく打ち明けると、新

宿へ向かう中央線のホームへと誘う。新宿駅で小田急線に乗り換え東北沢駅で降りる。東北沢駅の目の前には、小学校から一緒だったイトちゃんの家があり、当時は駅前の一階で、同居する叔母さんが小さな雀荘を始めたばかりだった。

「ここ、やねん」

彼に教えると、勢いよくドアを開けた。

「着いたよー！」

中には、私から頼まれ集合させられたアキとフミオが、イトちゃんと待っている。

世の中では、こちらの個人的な生活とは無関係に、相変わらず、勝手に色んなことが起きていた。ベトナム戦争は終わっていて、周恩来も毛沢東も死んだ。日本の元首相もピーナッツ問題で逮捕されている。

新聞も読まず、テレビもロクに観ない生活を、駆け落ちしてからは続けていた。本だけは、かなりな勢いで読んでいた。そして音楽も、とても重要だった。

この一九七六年はオリンピック・イヤーに当たり、空にはコンコルドが舞い上がり、冬と夏に、それぞれオリンピックが開催された。秋には、富士スピードウェイに、初めてフォーミュラ・ワンも来ている。少年誌の漫画雑誌の売り上げが、おそらくピークの時期だったろう。手塚治虫が、しゃかりきに、週刊誌だったマガジンにも、チャンピオンにも描いていた。そうし

たカルチャーが、私たちの常識だった。

まずは、私とオカダさんと、アキにフミオの四人で半チャンを囲んだ。イトちゃんは見学。

この頃の東京の西部地域にいた大学生も高校生も麻雀をしたならば、家庭麻雀の延長のようなルールと思われる『完全先づけ』という、最低でもイーハン以上の「役」をメンゼンでなければ完了しないと他人からはアガれないという、面倒なものを採用していた。ありていに申せば、喰いピンなし、喰いピンもなしである。しかし、大阪でオカダさんたちとしていた麻雀の方は、後に主流となる『ありあり』というルールで、喰いピンなし、されど喰いタンはありというものだった。イーハン以上の「役」となる字牌や三元牌を、メンゼンが前提であるリーチ以外の唯一の「役」にする場合には、決定的に、その処遇が分かれ道ともなる。どちらが本来的なルールだったのかまでは専門家でないことだが、その後には隆盛して主流となる関西に於いてのルールの方が、より場がスピーディーに行き合理化されていた。

その頃に東京で私たちに採用されていた方のルールでは、各自が自分の手牌の中の宇宙に惚れて高望みを目指す傾向に陥るため、さらに高い「役」での素晴らしいアガリも発生する確率は高まるが、その分、半チャン進行の能率は落ちて、のろくなる。



関西人は、動く歩道の上でも走ると言われた種類の日本人である。つまり、とても、せっかち。商売の勝機を待たせるわけにいかないと合理化を目指したのではないのか。あるいは、新聞社の事件記者たちが最初に考案したと何かで読んだ気もする。赤ウーピンなどのインフレ化したドラも、大阪で初めて体験していた。

オカダさんは、目を白黒させながら、普段と勝手の違う麻雀を、年上のメンツと関西代表という重圧を肩に果敢に戦った。半チャン二回で私は抜け、イトちゃんと交代した。その時点で、オカダさんは一人負けしていた。表情が真剣になった。相手は全員高校生である。無言で打ち始めた。

じやらじやらと硬い牌が掻き混ぜられ打ち合わされる音。それらを四人が手分けして自分たちの両手だけで各自の手前に表側を下にした伏せた状態で二列ずつ並べては、一方の列に、もう一方の列を重ねてサンドイッチのように載せる。カチャカチャカチャカチャ、パチツ。そんな音が、リセットの度ごとに東、南西北の席から繰り返され、ゲームは展開した。私たちの他に、住宅街では、平日の真昼の雀荘に来る暇人はいない。

昼から始めて、半チャンを六回やり精算した。オカダさんの負けは、かなり減った。でも、負けは負け。彼は深く現金を払い、アキたちは喜んだ。

「気をつけて帰ってくださいね」
明るくアキが言った。

「ほな、行ってくるわ」

「どこ行くんですか!」

フミオがつつこみ、私たちは爆笑した。ほんの数時間だけで、古くからの友人同士のような気やすい関係が生まれる。みんなに礼を言うと、オカダさんの後を追うように外へ出た。まだ夕方には、間がある。

「どないする? とりあえず新宿まで出ようか」

独り言のように呟くと、少し悔しそうにしていた彼に笑顔が戻ったのを確認した。

新宿駅構内の広いコンコースへ降りると、彼が言った。

「どこかへ行く」

「どこかって、どこへ?」

ちやうど、郊外へ向かう特急列車が発着するホームに近い場所にあった。

「ん。信州なんて、どや」

「へえっ! 信州? 東京は?」

「東京は、もう、ええ」

「もう、いいの? 信州のどこ?」

「とりあえず、松本かな」

目の前のホームの案内を読んで、ぼそりと呟く。一番早い特急に乗り、松本まで行った。

松本城の近くに宿を取り、当たり前前に風呂に入ると、部屋に調えられた夕飯を二人だけで食べた。不思議な時間が流れてい

た。この先が分かれている男女二人が過ごす刹那の瞬間を、どのように理解したら良いのかを計りかねた。

「就職は、せんことにした」

祖母が持つ物件が箕面にあり、そこで喫茶店を開くことにすると覚悟したように述べている。

「そうなんや。なら、これまでの経験が活きるね」

「せや。もう間に合わんかったし、やりたいことも特になしな」

「ワタシの方も、正式に九月に行くこと決まってる。二年くらいは、帰ってけえへんわあ」

既に話したことの確認を、また、ぼそつと告げる。その日の麻雀の話など楽しそうにしてはいても、心には、別々の感情が澱のように残されたまま沈んでいた。

彼とは一度も交わったことがない。それまでにも何度も、二人きりで夜を過ごし性的な付き合いをしてきたにも拘らず、彼は抱かなかつた。いつもオーラルで、彼だけを完了させる。何度かトライはしてみた。だが、彼が出来なかつた。それが機能的な問題だったのか、メンタルによるのが原因するのか判断はつかかなかつた。けれども、その部分は、少しでも私を傷つけていた。その晩も裸になり、同じような営みを、また重ねた。彼が、「ほっ」と、ため息をつくように満足し、それを感じて納得するだけだった。

このようなセックスが認められるものなのか?

ずっと疑問だった。その疑問は、自分が歳をとり、少しずつ解消されていった。永い年月をかけ、彼とは、連絡し合った。

あいだが何年も開いても、ふと思ひ出したように連絡を取り合う。顔を見る。素直になった魂と出会い、心が震える。恋人としてを終了してしまっただが、その心に触れる作業は継続していたのだろうと思わずにはいられない。

決して本音も本心も語らなかつた男の気持ち、今は、分かる気がする。そしてそのことは、たとえ若かつた自分が、あの時に分かつていたとしても、たぶん、全く意味をなさないことだったのだろう。

そういう愛もある。そうした息の永い愛情というものも存在すると分かる歳になった。

私は彼にしがみついで子供のように眠り、松本での静かな夜が更けていく。

裕福な家庭に育ち、CSN&Yが好きで、『あんた、あの娘のなんなのサ』という流行歌のフレーズを好み、運動部でも文化部でもあると引きずりこまれた応援団では少し精気を取り戻すが、それでも、パチンコと麻雀ばかりしていた不器用な男は、松本から東京を経由すると、真つ直ぐ兵庫へ帰っていった。

自宅の近くには一軒だけレコード店があった。店主が、とてもシニカルなニヒリストで大好きだった。嫌味に受け取られか

ねない直言もビシバシ言う彼を、逆に、とても誠実で正直な人物と見抜いていた。らつきようを逆さまに置いたみたいな逆三角の顔の下に、若作りのアイビールックを、不変と自慢する体型にいつも着せている。夜中に一本だけ嗜む煙草が美味いと、風変わりな健康志向を、くそ真面目に披露することもあった。控えめにしている優しい奥さんにも会う。そう言う彼が、正しく家族思いなのを微笑ましく意識する。

中三の夏休みに越してから通いだし、他では得られない安息を、その店では見出す。

「どこ行ってたんだよっ！ まったくつ。親を心配させて！」
「あはははあ。帰ってきたよ」

大声で叱られても嬉しい。照れるため、いつもと同じように、何かオススメの良いレコードはないのかと訊いた。相手も商売である。必ず小遣いを持っていると知られていた。気に入れば大量にアルバムを購入すると知っているため、熱心に試し聴きさせては説明してくれる。

店にいた穏やかな性格をしたバイトの青年は、辞めてから、実は、地域のツツパリ青少年たちからは尊敬される裏番長だったと判明した。店長は驚いた。けれど、話をそつと打ち明けられても驚くよりは、むしろ強く納得してしまう。

心と心とは、そういうふう繋がるものなんだ。

心が乾いた時には、そのレコード店へ行った。店主の毒舌を聞いては、心の泉に、たくさんの水を満たされ、買ったレコー

ドと一緒に持ち帰った。

「オレの葬式には、きつと誰もこない」

嘯く彼の葬儀には、きつと、本物のファンだけが駆けつけるよと信じて疑わなかった。

洋楽だけでなく日本のロックのアルバムも買い集めては、家族とは、ほとんど口をきかず、ヘッドフォンで毎晩のように音楽を聴きながら眠った。

当時はクレジットを読んだりもして、参加ミュージシャンの関係など勝手に想像し、やたらに詳しかった。やはり詳しいのが一人、同じ音楽系の同好会へ同期に入会した仲間だった。辞めてしまった高校の同級生では彼にだけ、例外的に電話していた。本格的なミュージシャンを彼は目指した。

駆け落ちを成功させるには資金が要る。必死に持ち物を売ろうとしていたのを、彼と、親友だったイトちゃんだけが内緒で手伝った。イトちゃんも、踊れて、ギターも弾く。ショウビジネスと役者の世界へ、彼女も自然に向かっていた。

渡英が延びたために出来た時間を利用して、車の運転免許を取ることにした。西新宿の代々木側に建つビルに下がっていた、大手タクシー会社由来する名称の垂れ幕に呼び込まれるようにして、そのビルの中にあつた事務所へ行き、合宿による運転免許の取得を説明され帰っている。まとまった額の現金が必要で、貯金などしないで、寓話のキリギリスのように生きていて

は自前では無理と判断されていた。

母を半ば騙すようにして、きつと車の運転免許は向こうへ行ったら絶対に必要になるはずだからと説得した。アメリカ合衆国へ行くなら、いざ知らず、行くのはイギリスである。そんな必要性は実は全くなかった。それでも母は騙されてくれた。ちやっかりと必要な資金を手にすると、それを、そっくり自動車学校へ払い込んだ。

誕生日は四月の後半で、同級生の友人たちの中でも一番早く十八歳を迎える。満十八歳になる前から自動車学校へ通えることを確認し、十八歳になると同時に免許を得ることを画策した。同級生たちは高二を終了し、春休みに入ろうとしていた。

フジタと会っていた。会話が弾んでいるとは決して言えなかった。食事しながら酒を飲んでいただけだが、彼にしては、珍しく飲み過ぎていると見えた。

「送っていくから」

ケリを着けるように彼が言って立ち上がり、店の外の道端に停めてあつた、見慣れぬ乗用車の方へさつさと向かう。暗褐色のシヤコタンタイプのスポーツタイプの古い車は、間違いない、暴走族仕様車だった。

「どうしたの？ これ」

「借りた」

幅の広い幹線道路でもある空いていた深夜の甲州街道を、車

は快走した。新宿から環七までは、すぐである。

彼は、アクセルを緩めない。ぐんぐんスピードを乗せてゆく。

明らかかな内面の暴走を表現するかのように、二人の人間の運命を搭せた車は、赤信号の交差点を、一つ、二つ、三つと強引に突っ切つて突破し続けた。爆音が轟き、車が振動する。両側から、急ブレーキ音と、派手なクラクション音が、間違っている狂った車を目がけ、深夜の寝静まる住宅街を目覚めさせるかのよう迫った。

二つ目を越えた時に口を開く。

「危ないでしょっ」

無視される。三つ目を通過する時には、大声で叫んだ。思わぬセリフだった。

「やめてっ！ アタシは、まだ死にたくないっ！」

憑かれたように執着していた暴走を、我に返つたかのように彼は緩めた。すぐそこに、大原の交差点が見える。方南町の自宅まで環七からは、細い生活道路を、車はくねくねと走らねばならない。間近まで近づいたところで、彼が吠えた。

「おい、プリン。今夜オレを家に泊める！」

「えっ！ なに言ってるの！ ダメに決まってるじゃない！」

「いいから、泊めろっ！」
どんなに抵抗して繰り返しても、彼の言葉は変わらない。男は傷ついていて、とても面倒だった。

「わかった。泊めてやるよ。だけど、アタシの部屋に泊まるの

は無理だ。いい？」

不貞腐れた。

このタイプの男には、口で説明して納得させるのは無理だ。仕方がない。そんなに見たいんなら見せてやるよ。それで自分で納得してもらうしかない。きつと彼なら、見れば分かるはずだ。私の抱えるものが、口で説明できるほど生易しいものではないということが。

覚悟を決めると、駐車する路上の位置を冷静に指示し、自宅へ彼を招き入れた。時間的に、まだ母は帰宅前だった。妹はいたはずだったが、出迎えたりはしないのが普通なので、会わずに済んでいる。母が出勤するため和服に着替える和室が唯一の客間でもあったため、そこへ来客用の夜具を敷き、自分の部屋は、さらに上階にあると、メゾネット形式の三階建てのマンションの角部屋である家の構造も解説した。充分に酔っている男を、あやすように寝かしつける。

「面倒は、また明日解決すれば良い。今は、もう眠りたい。」

起きると、彼は帰った後だった。少し拍子抜けした。妹が、猛烈に責める。

「なんなの？ 勝手に知らない男の人なんか泊めてっ！」

「ああ、そうだね。ごめん」

「だいたい、お姉ちゃんは、いつも勝手よ！ なに考えてんの

「か分からない」

「わかった。わかった。もういいでしょ。帰ったんだから」

「おかあちゃまだって、いきなり男の人が寝て困ってたわよっ！ 誰？ あの人の人」

「ああ。知り合い。泊めてって頼まれた。別に悪い人じゃないよ」

それ以上の会話は迷惑だった。

母は、とりあえず何も言わず、何も詰問されることがなかったのを安堵する。実害は、さほどなかったわけだし早く忘れたい、ぐらいいの感覚だったのだろう。彼女は異常ともみられる潔癖症だったので、その部分から追求されると面倒だなと警戒していた。食器棚の引き出しは洗うし、見知らぬ他人が触れた手すりやつり革を素手で触れない人である。自分の肌着や下着だけを当然のように分けて洗濯する人でもあった。

フジタの気持ちがかからないわけではなかった。こっちが傷つけているんだ。けれど分かったところで応えられない。そうになると、彼の無軌道は、はつきり迷惑なのだった。

歌舞伎町の店には、イギリスへ行く日が迫ったので退職すると告げた。退職は、毎月の給料の締め日でもある五日がキリが良いので、四月の五日と決まった。余計なことは一切話さなかった。フジタとのことも、運転免許を取りに行くことも、渡英が実は九月という事実も、何もかも。

フジタが家に泊まり、店長に退職を告げて間もなくである。常連客である、ビア樽のように太って色黒だったタカハシさんに、ふいに声をかけられた。

「お茶でも飲みに行かんか」

いつもの、低く、しゃがれてしまったドスの利いた声で、彼は真っ直ぐ見据えるようにして誘った。彼には、入店して以来ずっと可愛がられていた。彼も他の常連たちと同じように基本はいつも独りで来たが、特に彼は、だいたい決まった席を好んだ。彼の場合は、すぐに出入りの可能な玄関に近い階段の脇の薄暗い場所である。店の電話には、彼に用事のある誰かがかけてくるが多かった。新入りでも彼の名前もすぐに覚え、とても大切なお客として面倒がらずに、いつでも丁寧に応対するのを彼は目を細めて嬉しそうに居心地よくするのが伝わっていた。

彼がいない時に誰かが探しに来たり、あるいは電話が先にかかってきていれば、必ず、入ってきた彼にそのことを真っ先に伝えた。せっかく束の間の休息をしに入ってきたばかりの彼が、それを聞いて、慌てて出ていくことも珍しくなかった。まるで雇われた政治家の私設秘書のように、彼の希望を読み、彼の喜ぶ顔を、自分の満足にしたいと望んで働いた。決して、彼を恐れていたわけでも、また媚びていたわけでもない。ただ、そうすることが自分に求められる仕事だと分かっていたからだった。

特別扱いしたつもりすら全くなかった。同じようなことを、いつでも誰にでもしてあげたいと望んでもいた。個人的な付き合いが発生したフジタに対してすら、それまで同様の公平な接客を続けた。それは当たり前のことだろう。

その日は、早番だった。夕方前には退店できる。

「ほんなら、そんな時に、また」

彼は、納得して帰った。

タイムカードを押して制服を私服に着替え直してから店を後にする時刻になると、タカハシの使いだと名乗る造り笑顔の若い男性が、店の玄関の外で待っていた。小さな紙切れを渡される。教えられ、タカハシさんが待つ喫茶店へ急いだ。歌舞伎町の出口に近いビルの二階にあった、チェーン展開をしている静かな喫茶店に彼はいた。

「お待たせしました」

まず挨拶した。

「おう」

彼は、読んでいた新聞から目を上げて、座れと向かいの席を手で示す。腰を下ろすと、この、どうにも居心地の悪い状況を必死に理解しようと努力した。ウェイトレスに温かい紅茶を注文し、真つ直ぐ向かいの相手の顔を見る。

「なん…… でしょうか？」

笑顔が心かけた。

「そうさなあ」

何から話そうか迷っていると感じさせる。

「仕事辞めるんだってな」

「はい」

硬く答えた。

「昨日なあ。オレは若い女とな、ちよつと、いい感じになつちやつてな」

「はあ」

「それでホテル行って、やつちやつたんだよ」

彼は、握りこぶしから親指を少しだけ真ん中に覗かせる仕草をしてみせた。

「あ、ははあ」

話に引きずり込まれ、軽く笑った。

「そしたらさ。やつちやつた後で聞いたら、なんと、そいつが十四だって言うんだな、これが。女がさ」

「それは、また」

と言いながらも、彼が自分に何を話そうとしているのかを探っていた。

「十四は、さすがにマズいだろ？ いくらオレだって十四歳は良くないって思うさ。なあ」

「そうですね」

とはいえ、このピア樽に抱かれる十四歳が存在することにまづ驚かされ、それより何より未成年ということなら、アタシだってまだ十七だよ、タカハシさん、というセリフを、かろうじ

て胸に留める。

何が言いたいんだ？

何を話したいの？

とにかく、辛抱強く次の言葉を待った。すると今度は、自分は、全国露店商組合の副会長だと名乗る。

「露店商…… 組合ですか？」

「そうだ。お祭りとかに出る屋台があるだろ。あれのことだよ。」

つまりテキヤだ」

「ああ！ わかります」

安心した。そして、中二の時に代田橋の神社の祭りへ行き、困っていた『りんご飴』の屋台のおじさんを手伝って、最後には、お礼だと小遣いを貰い、翌日に学校へ行くと、それまで話したこともなかった不良っぽい三年生の先輩から、「よう！ テキヤの娘！」と、からかわれたことがあったのを目の前の彼に話した。

『りんご飴』は関西方面から来たばかりの屋台だったため代田橋では馴染みがなく、丸ごとの紅玉林檜に溶かした熱い飴を絡ませ冷まして固めて売る方式では値段が張り、買い食いするのが目的の子供の小遣いでは高値の花で売れ行きがサツパリだった。独りで祭り見物に出かけていて気づき、苦勞していたおじさんに声をかけると、林檎を切って小さいのを作り、売れ易くしてみたらどうかなどと勝手にちよっかいを出し、暇潰しして遊んだだけのことである。切り身にした林檎で作った低価格

の小さい『りんご飴』は売れたが、すぐに、切った林檎から汁が出るため飴が綺麗に固まらない欠陥があると判明し、無理なことだと諦めていた。それでも、最後までおじさんを見捨てずに、片付けまでも手伝っている。

一部始終を聞いたタカハシさんは愉しそうに笑った。テキヤって言葉は、その時に初めて知ったと白状する。

「プリン。なんでもいいから、オレに話してみな。話したいこと、なんでもいい。聞いてやるよ」

とても優しい眼差しと声のトーンだった。私には、もう分かっていた。彼は、たぶんフジタに頼まれたか、私たちを心配したか、している。自分が裏街道にも通じる者という正体まで明かした。その心に強く打たれた。

「タカハシさん。ワタシは、十六歳で先輩と駆け落ちして家を出た。大阪にいたんです。でも、その男は、正しい男ではなかった。ワタシにとり。それでもワタシは、自分の責任として、彼と別れてからも大阪で働いて暮らしていました。べつに家に対してホームシックとかはなくて、ただ、東京へのホームシック？ なのかな。自分の住んでいた街への、東京シック？ それは急に感じて。それで一度もどったの。その時に、東京にもどるのに実家の母に会わないのは、なんて言うか…… 片手落ち？ 何が足りない。間違いなのかなあと迷う気持ちがあつて。あ、ウチは両親離婚してるんです。それで、たまたま連絡した親戚みたいな付き合いだった人がいて、その人が、とにかく

くウチに来なさい。お母さんのことは、いいから。まずウチに来なさいって言ってくれて。それで、その人の家からウチに電話して、それで母と会って話した。去年のことです。その時に、高校は休学になってましたけどワタシは戻りたくなくて。だってね、戻っても一年先輩には、みんないる。初めは真面目にやるうと自分だけ思ったとしてもね、どうせまた、麻雀したり、みんなと遊んだりして過ごすようになる。そんなことはワタシは、もうやりたくない！ それなら大阪にいた方が、よっぽど自分らしく生きられる。そう思ってたね、帰ろうとしていたの。そしたら母が、外国へ行くなら行ってもいいって言った。ワタシは、外国へは行きたかった。子供の頃からの夢です。それで、考えて、家に戻ることにした」

一気に話した。胸の仕えが、すうーと消えるようだった。彼は、ところどころで、うん、うんと頷いてくれていた。

「それから？」と促され私は続けた。

「イギリスへ行くのは…… それは確かに、逃げなのかもしれない。ワタシにも分かっていきます。イギリスへ行ったからって、急に何かが変わるわけでも良くなるわけでもない。逃げ出すみたいで嫌だなと、ワタシも、さんざん考えました！ でもね。タカハシさん。ワタシは、あの家にいたくないんです！ 自分がダメになる。だけどワタシの歳で、やれることって、そんなないじゃないですか？ もう少し、自分に力をつけないと、自分の生きたいように生きるのは無理です」

明らかに納得した表情に彼は変わった。

「プリン。オマエの生き方は間違っていない。そうか。頑張れよ！」彼は何も質問せず、ただただ頷きながら、最後に、そう励ました。親子ほども年齢の違う性別も違う二人が、心を通わせられた奇跡のような恵まれた時間。

彼に礼を言つて外へ出ると、爽やかな風を頬に受けて、また前を向いて歩いてゆけそうな予感を抱きしめた。

*

フジタにも呼ばれた。

「メシでも食おう」と誘われ、断れなかった。

向かい合つて食事をしながらも、ずっと不貞腐れていた。先日の前例がある。また面倒を押しつけられるのは嫌だった。気が重い食事は、食べない方が良くくらいだ。寡黙に過ぎた食事が終わると真面目な顔つきに変わった彼が、真っ直ぐ向き直つた。

「プリン。オレのことを怒ってるのか？」

「べつに、怒っちゃいない」

ぶっきらぼうにボソボソ言った。

「そうか。オレのことは嫌いかな？」

「嫌いじゃない」

「そうか」

しばらくは、困ったような苦しそうな表情をしてみたり横を向いたり上を見たり子供のようには戸惑って迷ってもいるようにしてもいたが、最後には、垂れていた頭を上げて意を決したように、

「プリンよ。オマエは、カタギで生きていけっ！」

突き放すようにして彼は、驚くセリフを絞りだした。両眼が、向かい合うこちらの瞳に赤く充血して映る。震える唇が、決意の重みを教えた。

あつたりまえじゃねえかつ！

と頭の中では叫び、けれども、見開いた臉を閉じると、また、ゆつくりと開いて、

「そうするよ」

とだけ、穏やかに告げた。

真一文字に結んだ唇を、彼がへの字に曲げ、こくと頷くと、私たちの別れの儀式は完了していた。胸の中には、心の泉にゴボゴボと噴き出すような感情があった。それが「感謝」かもしれないと分かるまでには、永い時間が必要だった。

飛行機は、しばらく滑走路を頑張って走ってから、海の手前で思い切りよく、ふわりと浮揚した。フルスロットルの轟音から解放され、機内は、ごんごんと鈍いエンジン音に満たされる。まだ旋回しながら上昇しているため、機体の傾きによって窓ガラスの向こうに見える景色も変わる。離陸は夕方だ

った。東京の夜景も、当分は見納めである。

「アンカレッジまでは時間がありますから、空いているし、横になつて休めばいいですよ。ロンドンまでは遠いです」

「たまたま同乗する航空会社の若い日本人社員は言った。確かに、大英帝国が運営する会社のこの飛行機には、乗客がいない。少なくとも、エコノミー席はガラガラだった。日本人は、せつかく乗るなら、言葉の通じる日本の飛行機に乗りたいたいだろう。機内食も、これから食べることになる、評判の良いイギリス料理より、馴染んだ日本食を選びたい人情も分かる気がする。機内アナウンスを真面目に聞いても、その英語が、さっぱり分からない。大丈夫だろうかと少し不安になる。でももう、ここまできて不安がっても仕方ない。」

空港には、同級生が総勢八人と、最後の職場の人や家族など全部で十四人もの見送りが集まっていた。前夜には『段』で、自分で発案した送別会もやった。『段』のトイレで気絶して寝込んでしまっていたとは、担いで自宅までタクシーで送り届けてくれたアキとフミオから、さつき教えられる。目が覚めたら、自室の床で大の字で伸びていた。見送りが先に到着してから、恥をかきつつ照れて最後に登場となる。

陥落前のサイゴンから脱出する喧騒かと感想を述べたくなるくらいに混雑ぶりで殺気立つ、パンク寸前の九月後半の羽田空港国際線ロビーだった。その人混みを掻き分け、最後のチャン

スに間に合った駿足の友人がいた。『段』にも来ていた同級生のヤンマだった。大勢の人が最後のお別れをする穴あきのアクリル壁の向こうから、

「イマデ！ 元気で行ってこいよな！」と紅潮した顔の彼が叫ぶ。

「おう。ありがとう、ヤンマ。行ってくるぜ！」

周囲を驚かせながら大声で返事した。

「頑張れよ！」

「おまえもな！」

たくさんの「頑張れ」に見送られ、純粋な魂からの元気を渡された。まだ興奮している。

夏に大阪へ挨拶に行った時のことを考える。オカダさんにも会えやし、何も変わってなかったなあ……

独りぼっちになってから住んでいた会社の女子寮の近くに、通った貸本屋があった。その書店では、最初に「青春の門」を一巻から連続して借りた。寮の部屋で独りで読み耽りながらも、こんなに簡単に一晩で一冊読めてしまう小説が、本当に文学なのかしらと驚いている。その小説は、在日朝鮮人のカナイさんが好きなものだった。

仲良くしてもらった貸本屋のおばちゃんにも挨拶した。手紙ですからねと約束してきた。カナイさんに急に電話したのは、間違いだっただろうか……

彼は、ホテルの部屋のベッドの上で朝鮮半島と日本の関係を近代から現代にかけて解説してくれた人である。私は、何も知らなかった。彼が日本人ではないと告白する言葉を最初は冗談かと思っただくらいである。日本で生まれ日本で育ち日本語が上手に話せない。けれど彼らは陸封された姫鱒のように外へ行く自由を奪われていた。勝手に連れてこられて、後は、その子孫も含め、どうでも好きにしてくださいと誰も責任を取らない。そんな不条理をする国でもあったんだとの厳しい現実を知った。学校では決して教えなかった。そして彼は、「ゲット レディ？」とも、純粋な覚悟を告げてくれた。

のんきだった私は母から、

「その人とは結婚は考えない方がいい」とキツパリ反対された。反発を感じたが、結局は、その彼女の言葉が、自分の後ろ向きな姿勢を後押しした。大変さを乗り越えられるだけの強さを自分が持っているかどうかは、自分だけが良く分かっている。今の自分には、もうとても無理だろうと気づいていた。

母は、都会育ちの私とは違い、偏見の強い古風な土地柄である地方で育ち、より身近に多く在住する大陸から来た人たちへの一般的な彼女たちの常識を示した。本人に満州の旅順で生まれ過ごした時期があってもなお、そうした偏見を常識としてしまいう間違いを克服できず成長してきた。

どこの国に於いても、どの民族にあっても、人々は死んでゆく者と新しく生まれる者とが絶えず入れ替わる。人間の身体中

の細胞が二日で新旧入れ替わるのと同じく世代は交替する。必ず、違う未来を手にすることは可能だ。より良い将来とすることが出来るかどうかは常に、一人一人の、誠実な生き方に委ねられているだろう。

挨拶だけの電話をして彼を悲しませ、自分も悲しくなってしまう。けれども、しないよりは、した方が良かったと前向きに思えるようになった。日本と在日の人たちとの付き合い方も、時を経て、少しは改善されたように思われる。

世間の常識や規格から外れてはいても、「学校」と呼ぶべき時期を卒業した。さらなる「上級学校」へと向かっていく。とりあえず、周りの同級生たちの誰よりも早く、運転免許も手にしたんだ。

様々なものが想いとともに、洗い流されたように消え去っている。「記憶」という引き出しの中へ、きちんとたたんで、しまわれていた。

母は、重い別送の荷物を妹と二人で空港へ届けてくれていた。スーツケースには入りきらない和服などである。当面は必要ないものを別送品として荷造りしていた。それを彼女は考えた末に、エアカーゴとして航空便で送る手続きまでしていた。ずいぶんと高かったことだろう。自分に知識がなかったとはいえず、し訳ないことをした。

この時代、日本は変動相場制には移行していたので1ドル三

百六十円ではなかったが、それでもまだ米ドルは日本円に対し高かった。三百円くらいしていた。また、外貨の持ち出し制限もあり、海外渡航者は五百ドルまでしか国内からは持つて出られなかった。

様々な費用面を考えると、本当に容易なことではなかったろう。

見送りにきていたアキたちは、きつと、こう言ったに違いない。

「行っちゃったね。イマデ……」

「アイツはいつも、ゴーイング・マイ・ウェイだ！」

空席の目立つ機内では、各々がスペースを確保し始める。しかし私は、全く寝るつもりなどなかった。寝るなんて、もったいない。この貴重な瞬間を総て記憶しておくためにも、私は絶対に寝ないぞと心に誓っていた。

「東京の夜景が遠ざかると空は、ずうーっと暗い闇へと果てなく続く。飛行機は雲の上を飛んだ。星だけは光っている。窓が冷たい。それでも私は、まんじりともせず座席に腰掛け、外を眺めて飽きなかった。

すべての物や物事は不変ではいられない。不変はあり得ない。ほぼ半永久的に変わらないかのように思われた何事も、いつかは変化するのだ。

地形も…… 気象も…… 宇宙も…… また同じ。

子供の頃に薄暗い図書館に籠もり好んで眺めた地球の歴史を描く想像画の世界には、夢を超越した息を呑む驚きに匹敵するリアルが淡々と語られていた。

遠い遠い過去の地球には海すらもなかった。人類誕生以前の世界には、まず、可視で動く生き物のない静寂のグリーンな世界だけがあり、植物の光合成により大気中の酸素濃度が増すと、海中には、永い年月をかけて、ウルトラQに現れてもおかしくないような三葉虫とアンモナイト全盛の時期が訪れる。それから、比較すると化け物のように巨大なトンボが飛ぶ昆虫支配の世界が出現し、脊椎を持つ魚類が跋扈し、ようやく、一部が鳥類へと進化し残りは絶滅したとされる、永い永い恐竜時代がやってくるらしかった。どういう按配か、その終焉を予期するかのようにして哺乳類は登場する。我々の遠い祖先だ。体の割に賢いネズミみたいな体毛を持つ小動物は生き延びた。

物事は、アレもコレも連綿として様々につながり、そして作用し合いながら変化し続ける。

必ず、不変ではない。

いつの日か、太陽が超新星になり、爆発して果てる時がやってくる。その必然に向かい時は刻まれる。

私たちの生は、一瞬の煌めきのようなものだ。

E N D